太宰治全集

7

筑摩書房

太宰治全集第七卷

昭和四十二年十月　三　日初版第一刷発行
昭和四十五年六月　二十　日初版第六刷発行

著者　太宰治

發行者　竹之内靜雄

發行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

印刷・三晃印刷
製本・鈴木製本

(分類) 0393 (製品) 70007 (出版社) 4604

第七卷　目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

津輕　三
惜別　一五七
お伽草紙　二七一
瘤取り　二七四
浦島さん　二九〇
カチカチ山　三二五
舌切雀　三四九
後記　三七三

太宰治全集

第七卷

津

輕

津輕の雪

こな雪
つぶ雪
わた雪
みづ雪
かた雪
ざらめ雪
こほり雪

（東奥年鑑より）

序　編

或るとしの春、私は、生れてはじめて本州北端、津輕半島を凡そ三週間ほどかかつて一周したのであるが、それは、私の三十幾年の生涯に於いて、かなり重要な事件の一つであつた。私は津輕に生れ、さうして二十年間、津輕に於いて育ちながら、金木、五所川原、青森、弘前、淺蟲、大鰐、それだけの町を見ただけで、その他の町村に就いては少しも知るところが無かつたのである。

金木は、私の生れた町である。津輕平野のほぼ中央に位し、人口五、六千の、これといふ特徴もないが、どこやら都會ふうにちよつと氣取つた町である。善く言へば、水のやうに淡泊であり、惡く言へば、底の淺い見榮坊の町といふ事になつてゐるやうである。それから三里ほど南下し、岩木川に沿うて五所川原といふ町が在る。この地方の產物の集散地で人口も一萬以上あるやうだ。青森、弘前の兩市を除いて、人口一萬以上の町は、この邊には他に無い。善く言へば、活氣のある町であり、惡く言へば、さわがしい町である。農村の匂ひは無く、都會特有の、あの孤獨の戰慄がこれくらゐの小さい町にも既に幽かに忍びいつてゐる模樣である。大袈裟な譬喩でわれながら閉口して申し上げるのであるが、かりに東京に例をとるならば、金木は小石川であり、五所川原は淺草、といつたやうなところでもあらうか。ここには、私の叔母がゐる。幼少の頃、私は生みの母よりも、この叔母を慕つてゐたので、實にしばしばこの五所川原の叔母の家へ遊びに來た。私は、中學校にはひるまでは、この五所川原と金木と、二つの町の他は、津輕の町に就いて、ほとんど何も知らなか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

つたと言つてよい。やがて、青森の中學校に入學試驗を受けに行く時、それは、わづか三、四時間の旅であつた筈なのに、私にとつては非常な大旅行の感じで、その時の興奮を私は少し脚色して小說にも書いた事があつて、その描寫は必ずしも事實そのままではなく、かなしいお道化の虛構に滿ちてはゐるが、けれども、感じは、だいたいあんなものだつたと思つてゐる。すなはち、

「誰にも知られぬ、このやうな侘びしいおしやれは、年一年と工夫に富み、村の小學校を卒業して馬車にゆられ汽車に乘り十里はなれた縣廳所在地の小都會へ、中學校の入學試驗を受けるために出掛けたときの、そのときの少年の服裝は、あはれに珍妙なものでありました。白いフランネルのシヤツは、よつぽど氣に入つてゐたものとみえて、やはり、そのときも着てゐました。しかも、こんどのシヤツには蝶々の翅のやうな大きい襟がついてゐて、その襟を、夏の開襟シヤツの襟を背廣の上衣の襟の外側に出してかぶせてゐるのと、そつくり同じ樣式で、着物の襟の外側にひつぱり出し、着物の襟に覆ひかぶせてゐるのです。なんだか、よだれ掛けのやうにも見えます。でも、少年は悲しく緊張して、その風俗が、そつくり貴公子のやうに見えるだらうと思つてゐたのです。久留米絣に、白つぽい縞の、短い袴をはいて、それから長い靴下、編上のピカピカ光る黑い靴。それからマント。父はすでに歿し、母は病身ゆゑ、少年の身のまはり一切は、やさしい嫂（あによめ）の心づくしでした。少年は、嫂に怜悧に甘えて、むりやりシヤツの襟を大きくしてもらつて、嫂が笑ふと本氣に怒り、少年の美學が誰にも解せられぬことを涙が出るほど口惜しく思ふのでした。「瀟洒、典雅。」少年の美學の一切は、それに盡きてゐました。いやいや、生きることのすべて、人生の目的全部がそれに盡きてゐました。マントは、わざとボタンを掛けず、小さい肩から今にも滑り落ちるやうに、あやふく羽織つて、さうしてそれを小粹な業だと信じてゐました。どこから、そんなことを覺えたのでせう。おしやれの本能といふものは、手本がなくても、おのづから發明するものかも知れません。

ほとんど生れてはじめて都會らしい都會に足を踏みこむのでしたから、少年にとつては一世一代の凝つた身なりであつたわけです。興奮のあまり、その本州北端の一小都會に着いたとたんに、少年の言葉つきまで一變してしまつてゐたほどでした。かねて少年雜誌で習ひ覺えてあつた東京辯を使ひました。けれども宿に落ちつき、その宿の女中たちの言葉を聞くと、ここもやつぱり少年の生れ故鄕と全く同じ、津輕辯でありましたので、少年はすこし拍子拔けがしました。生れ故鄕と、その小都會とは、十里も離れてゐないのでした。」

この海岸の小都會は、青森市である。津輕第一の海港にしようとして、外ケ濱奉行がその經營に着手したのは寬永元年である。ざつと三百二十年ほど前である。當時、すでに人家が千軒くらゐあつたといふ。それから近江、越前、越後、加賀、能登、若狹などとさかんに船で交通をはじめて次第に榮え、外ケ濱に於いて最も殷賑の要港となり、明治四年の廢藩置縣に依つて青森縣の誕生すると共に、縣廳所在地となつていまは本州の北門を守り、北海道函館との間の鐵道連絡船などの事に到つては知らぬ人もあるまい。現在戶數は二萬以上、人口十萬を越えてゐる樣子であるが、旅人にとつては、あまり感じのいい町では無いやうである。たびたびの大火のために家屋が貧弱になつてしまつたのは致し方が無いとしても、旅人にとつて、市の中心部はどこか、さつぱり見當がつかない樣子である。奇妙にすすけた無表情の家々が立ち並び、何事も旅人に呼びかけようとはしないやうである。旅人は、落ちつかぬ氣持で、そそくさとこの町を通り拔ける。けれども私は、この青森市に四年ゐた。さうして、その四箇年は、私の生涯に於いて、たいへん重大な時期でもあつたやうである。その頃の私の生活に就いては「思ひ出」といふ私の初期の小說にかなり克明に書かれてある。

「いい成績ではなかつたが、私はその春、中學校へ受驗して合格した。私は、新しい袴と黑い沓下

とあみあげの靴をはき、いままでの毛布をよして羅紗のマントを洒落者らしくボタンをかけずに前をあけたまま羽織つて、その海のある小都會へ出た。そして私のうちと遠い親戚にあたるそのまちの呉服店で旅裝を解いた。入口にちぎれた古いのれんのさげてあるその家へ、私はずつと世話になることになつてゐたのである。

私は何ごとにも有頂天になり易い性質を持つてゐるが、入學當時は錢湯へ行くのにも學校の制帽を被り、袴をつけた。そんな私の姿が往來の窓硝子にでも映ると、私は笑ひながらそれへ輕く會釋をしたものである。

それなのに、學校はちつとも面白くなかつた。校舍は、まちの端れにあつて、しろいペンキで塗られ、すぐ裏は海峡に面したひらたい公園で、浪の音や松のざわめきが授業中でも聞えて來て、廊下も廣く教室の天井も高くて、私はすべてにいい感じを受けたのだが、そこにゐる教師たちは私をひどく迫害したのである。

私は入學式の日から、或る體操の教師にぶたれた。私が生意氣だといふのであつた。この教師は入學試驗のとき私の口答試問の係りであつたが、お父さんがなくなつてよく勉强もできなかつたらう、と私に情ふかい言葉をかけて呉れ、私もうなだれて見せたその人であつただけに、私のこころはいつそう傷つけられた。そののちも私は色んな教師にぶたれた。にやにやしてゐるとか、あくびをしたとか、さまざまな理由から罰せられた。授業中の私のあくびが大きいので職員室で評判である、とも言はれた。私はそんな莫迦げたことを話し合つてゐる職員室を、をかしく思つた。

私と同じ町から來てゐる一人の生徒が、或る日、私を校庭の砂山の蔭に呼んで、君の態度はじつさい生意氣さうに見える、あんなに毆られてばかりゐると落第するにちがひない、と忠告して呉れた。私は愕然とした。その日の放課後、私は海岸づたひにひとり家路を急いだ。靴底を浪になめら

れつつ溜息ついて歩いた。洋服の袖で額の汗を拭いてゐたら、鼠色のびつくりするほど大きい帆がすぐ眼の前をよろよろととほつて行つた。」

この中學校は、いまも昔と變らず青森市の東端にある。ひらたい公園といふのは、合浦公園の事である。さうしてこの公園は、ほとんど中學校の裏庭と言つてもいいほど、中學校と密着してゐた。私は冬の吹雪の時以外は、學校の行き歸り、この公園を通り拔け、海岸づたひに歩いた。謂はば裏路である。あまり生徒が歩いてゐない。私には、この裏路が、すがすがしく思はれた。初夏の朝は、殊によかつた。なほまた、私の世話になつた呉服店といふのは、寺町の豐田家である。二十代ちかく續いた青森市屈指の老鋪である。ここのお父さんは先年なくなられたが、私はこのお父さんに實の子以上に大事にされた。忘れる事が出來ない。この二、三年來、私は青森市へ一、三度行つたが、その度毎に、このお父さんのお墓へおまゐりして、さうして必ず豐田家に宿泊させてもらふならはしである。

「私が三年生になつて、春のあるあさ、登校の道すがらに朱で染めた橋のまるい欄干へもたれかかつて、私はしばらくぼんやりしてゐた。橋の下には隅田川に似た廣い川がゆるゆると流れてゐた。全くぼんやりしてゐる經驗など、それまでの私にはなかつたのである。うしろで誰か見てゐるやうな氣がして、私はいつでも何かの態度をつくつてゐたのである。私のいちいちのこまかい仕草にも、彼は當惑して掌を眺めた、彼は耳の裏を搔きながら呟いた、などと傍から傍から說明句をつけてゐたのであるから、私にとつて、ふと、とか、われしらず、とかいふ動作はあり得なかつたのである。橋の上での放心から覺めたのち、私は寂しさにわくわくした。そんな氣持のときには、私もまた、自分の來しかた行末を考へた。橋をかたかた渡りながら、いろんな事を思ひ出し、また夢想した。そして、おしまひに溜息ついてかう考へた。えらくなれるかしら。

（中略）

なにはさてお前は衆にすぐれてゐなければいけないのだ、といふ脅迫めいた考へからであつたが、じじつ私は勉強してゐたのである。三年生になつてからは、いつもクラスの首席であつた。てんとりむしと言はれずに首席になることは困難であつたが、私はそのやうな嘲りを受けなかつた許りか、級友を手ならす術まで心得てゐた。蛸といふあだなの柔道の主將さへ私には從順であつた。教室の隅に紙屑入の大きな壺があつて、私はときたまそれを指さして、蛸もつぼへはひらないかと言へば、蛸はその壺へ頭をいれて笑ふのだ。笑ひ聲が壺に響いて異樣な音をたてた。クラスの美少年たちもたいてい私になついてゐた。私が顏の吹出物へ、三角形や六角形や花の形に切つた絆創膏をてんてんと貼り散らしても誰も可笑しがらなかつた程なのである。

私はこの吹出物には心をなやまされた。そのじぶんにはいよいよ數も殖えて、毎朝、眼をさますたびに掌で顏を撫でまはしてその有樣をしらべた。いろいろな藥を買つてつけたが、ききめがないのである。私はそれを藥屋へ買ひに行くときには、紙きれへその藥の名を書いて、こんな藥がありますかつて、と他人から賴まれたふうにして言はなければいけなかつたのである。私はその吹出物を欲情の象徵と考へて眼の先が暗くなるほど恥づかしかつた。いつそ死んでやつたらと思ふことさへあつた。私の顏に就いてのうちの人たちの不評判も絕頂に達してゐた。他家へとついでゐた私のいちばん上の姉は、治のところへは嫁に來るひとがあるまい、とまで言つてゐたさうである。私はせつせと藥をつけた。

弟も私の吹出物を心配して、なんべんとなく私の代りに藥を買ひに行つて呉れた。私と弟とは子供のときから仲がわるくて、弟が中學へ受驗する折にも、私は彼の失敗を願つてゐたほどであつたけれど、かうしてふたりで故郷から離れて見ると、私にも弟のよい氣質がだんだん判つて來たので

ある。弟は大きくなるにつれて無口で內氣になつてゐた。私たちの同人雜誌にもときどき小品文を出してゐたが、みんな氣の弱々した文章であつた。私にくらべて學校の成績がよくないのを絕えず苦にしてゐて、私がなぐさめでもするとかへつて不機嫌になつた。また、自分の額の生えぎはが富士のかたちに三角になつて女みたいなのをいまいましがつてゐた。額がせまいから頭がこんなに惡いのだと固く信じてゐたのである。私はこの弟にだけはなにもかも許した。私はその頃、人と對するときには、みんな押し隱して了ふか、みんなさらけ出して了ふか、どちらかであつたのである。私たちはなんでも打ち明けて話した。

秋のはじめの或る月のない夜に、私たちは港の棧橋へ出て、海峽を渡つてくるいい風にはたはたと吹かれながら赤い糸について話し合つた。それはいつか學校の國語の敎師が授業中に生徒へ語つて聞かせたことであつて、私たちの右足の小指に眼に見えぬ赤い糸がむすばれてゐて、それがするすると長く伸びて一方の端がきつと或る女の子のおなじ足指にむすびつけられてゐるのである。ふたりがどんなに離れてゐてもその糸は切れない、どんなに近づいても、たとひ往來で逢つても、その糸はこんぐらかることがない。さうして私たちはその女の子を嫁にもらふことにきまつてゐるのである。私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ歸つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた。私たちはその夜も、波の音や、かもめの聲に耳傾けつつ、その話をした。お前のワイフは今ごろどうしてるべなあ、と弟に聞いたら、弟は棧橋のらんかんを二、三度兩手でゆりうごかしてから、庭あるいてる、ときまり惡げに言つた。大きい庭下駄をはいて、團扇をもつて、月見草を眺めてゐる少女は、いかにも弟と似つかはしく思はれた。私のを語る番であつたが、私は眞暗い海に眼をやつたまま、赤い帶しめての、とだけ言つて口を噤んだ。海峽を渡つて來る連絡船が、大きい宿屋みたいにたくさんの部屋部屋へ黃色いあかりをともして、ゆらゆらと水平線か

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo